

谷口智彦著「日本の立ち位置がわかる国際情勢のレッスン - バズワードで世界を読む - 」

PHP 研究所 2010年8月9日刊を読む

インドと「ミニラテラル」会議を

- 1 .実はインドくらい強く言う国もそんなにない。日本から見ていると気づきにくいことだけれども、中国海軍がインド洋進出を本格化させつつある今、あれだけの巨大な国が四方八方を中国で囲まれ、戦略空間を狭められつつあるかに感じている。
- 2 .安倍晋三総理の訪印やその歳の議会演説、麻生太郎外相(肩書きはいずれも当時)の「自由と繁栄の弧」スピーチが、いまだにインド人有識者に強い印象とともに記憶されているのはそのためだ。
- 3 .しかも当たり前だがインド人は英語が話せ、そのうえ口数が多い。日本人に足りない口舌運の能力に長けている。リベラル欧州の真ん中で、インド人に地政学を語ってもらうことくらい、間接的に日本の役に立つこともない。
- 4 .インドは「印日米」「印日英」「印日欧」「印日豪」、それから「印日インドネシア」とか「印日ベトナム」とか、いろんなマルチラテラル(多数国間)ならぬ「ミニラテラル(限定国間)」会議を開くのに、日本にとってまたとないパートナーだ。会議を開くだけならそうカネもかからない。日本外交にやってほしい路線である。
- 5 .「ミニラテラル」、すなわち「日印+ 1」の集まりをもちたいと、インドはさかんな働きかけを日本側にしている。全部応じればいいと思う。
- 6 .デリーと東京にはえもいわれぬ親和性がある。インドで世論調査をして、日本が親しみを感じる国の上位に挙がられなかったことはない。毎年毎年、広島に原爆が落ちた日に、インド議会議長が哀悼の意を表してくれるようになって、何年が経つことか。
- 7 .文中述べたような地政学的発想でインド洋のパワーバランスを考えようとする論考が、米国人からもこの後いろいろと出るようになった。代表的論客、ロバート・カプランが笹川平和財団の招きで来日、話をするのを聞きに出かけたら、海洋覇権の古典をものしたアルフレッド・セイヤー・マハンのもとより、「ランドパワー」論のハートフォード・マッキンダー、「リムランド」論のニコラス・スパイクマンといった古色蒼然たる名前が次々出てきて、時代がひとめぐり、昔に戻ったかの感にとらわれた。

8 . さんざ戦争してようやく「友愛」でいくしかなくなった欧州とは違って、アジアは世界史変革をこれから目撃する。ならせ、インド、中国、日本が同時に大国である時代など、有史以来一度もなかったのであるから。先行き不透明な時代だからこそ、インドは海洋民主主義国家・日本に潜在的同盟相手を見、接近したいと考えている。それ自体がすぐれて地政学的発想に立つものだ。

P60 ~ 62

[コメント]

日本でも有数の国際発信力をもつ谷口さんの新著。日本の国益とは何かを常に考え続けるとどのような結論になるか。日本のなすべきことを具体的に示し続ける谷口さんの考えがよくわかる。

- 2010年7月27日 林 明夫記 -